玉村町立南中学校　　発行日　平成２９年１月１０日

学校だより　No.34

発行者　校長　棗　原　靖　一

☆明けましておめでとうございます

冬休みもあっという間に終わり、学校生活が始まります。冬休み前には「全校集会」で、目標を持つことの大切さについてお話しましたが、新しい年を迎えて、何か目指すものを決めたでしょうか。これからの学校生活を送る中で、ぜひ見つけてほしいと思います。

また、「学校だより」では、自転車の交通事故のデータをもとに命の大切さについてお伝えしました。お正月気分が抜けないまま、気をゆるめていると、大きな事故につながります。くれぐれも登下校や外出時は交通安全を意識してください。

今年も、皆さんが目指すものに向かって力いっぱい努力し、充実した学校生活を送ることを期待しています。

☆勉強も　部活動も

武井壮というタレントがいます。経歴を調べると驚くことがたくさんある方ですが、わずか２年半という競技歴で、１９９７年の第８１回日本陸上競技選手権大会の十種競技において、優勝しています。１００m走の記録１０秒５４は２０１５年まで、十種競技・１００mの日本最高記録だったそうです。

テレビに出始めの頃は、自称「百獣の王」と言いながら、動物を素手（すで）で倒す方法などをネタとして披露（ひろう）していました。たいして面白いとは思っていませんでしたが、この人の生き方が面白いなと思うようになりました。なかでも、東京にある高尾山に腕だけで登ったという話は驚きました。トレーニングとはいえ、足を使わずに山に登る、というのは相当な体力の持ち主だと思いました。また、よく恥ずかしくないなとも思ったのでした。

その武井壮さんの人柄がよく出ている言葉を見つけました。

１番いい練習メニューなんて結局死ぬまでわかんねえ。
研究者だってそのうち意見が変わるしな。
でも良くない練習は分かるだろ。
手抜いたら１００％分かる。
自分で抜いてんだから。
それじゃやること１つだ。
絶対に手を抜かねえでやり切る。
そうすりゃいい練習なんて勝手に見えてくる。

競技を始めて、たった２年半で日本一になったほどの実力者ですから、言うことも豪快です。ただ、「なるほどな」とも思いました。きっと武井さんは、強くなるために徹底して自分を鍛（きた）え抜いたのだと思います。その練習が良いのか悪いのか、やっていることが正しいのか正しくないのか、いろいろと悩みながら取り組んできたのかもしれません。その一つが、「高尾山に腕だけで登る」ということだったのかもしれません。

いずれにせよ、やると決めたら徹底的にやったのでしょう。そんなことが伺える言葉だと感じました。この言葉を見つけた時、私は武井さんのことが好きになりました。すごい言葉だなと思いました。勉強にも部活動にも、あるいは人の生き方にも通じるところがある言葉だなと思いました。

☆あいさつの意義

私は、皆さんが集会の時に大きな声であいさつをしてくれるのを、とても楽しみにしています。実は、それ以上に楽しみなのは、毎朝、玄関で返してくれる「おはようございます」や廊下ですれ違う時の「こんにちは」、下校時の「さようなら」のあいさつです。集団であいさつをするのは、それほど苦にならないでしょう。周りの人も一緒に声を出しますから、少しくらい小さな声でも目立ちません。でも、朝や昼間、帰りの時のあいさつは、１人１人が行うものです。自分が意識して声を出さなければならないものです。その時に、自信を持って大きな声で返してくれるあいさつは、受ける側もとても気持ちがいいものです。

中学生になると、だんだん気持ちが大人になってきます。照れくささや恥ずかしさが出てくる頃です。そういう年頃で、自分の殻を一つ破るのも成長の過程で大切なことかと思います。

さて、なぜ「あいさつ」は大切だと言われるのでしょうか。社会の常識だから？　会社に勤めた時に必要だから？　また、なぜ「あいさつ」というものがあるのでしょうか。

「あいさつ」は言語の数だけあると言われています。細かいことを言えば、５，０００～８，０００語もの言語が存在するそうですが、日本にも１５くらいの言語があると言われているので、数えればきりがないようです。国連加盟国は現在１９３か国あるので、少なくとも１９３か国は別々の言語のあいさつが存在するということでしょうか。つまり、世界中の人々が自分の国の言葉であいさつをしているということになります。言語を持っている国は、皆あいさつの言葉を持っているということです。言い換えれば、世界中の国々で言葉が生まれた時に、あいさつの言葉が必要だったということです。

では、なぜ「あいさつ」が必要であったのか？　きっと、こういうことではないでしょうか。

大昔、まだ言葉がなかった時代。人間は狩りをしながら生活をしていました。毎日毎日、食べ物を必死で手に入れるために、野や山を駆け巡っていました。明日の食べ物も手に入らない時もあったでしょう。やっと手に入れた食べ物は、家族のために命がけで守らなければなりません。誰かが奪いに来るかもしれないからです。

しかし、人は一人では生きられません。仲間の助けが必要です。家族ができればなおさらです。力のない子どもや奥さんのために、力を合わせて複数で協力しなければなりません。そんな時、お互いが敵ではないこと、食べ物を奪いに来たのではないこと、仲間であることをどうやって伝えるでしょうか。見ず知らずの人間同士、仲良くなるために、敵ではないことを知らせるために、何が必要だったでしょう。

それが「あいさつ」の始まりではないでしょうか。お互いが仲間であることを伝えあって、協力して食べ物を取る。個人から家族へ、家族から集団へ、やがて、大きな集団となり、集落になっていったのでしょう。ついには、作物や穀物を作るようになり、定住するようになったのでしょう。村の始まりです。

あいさつは、「自分は敵ではないよ」「仲間だよ」「協力して生きていこうよ」という仲間づくりの始まりに絶対に必要だったはずです。そう考えると、人間が生きていく上で、「あいさつ」がとても重要なものだったことが分かります。

ずいぶんと大げさな話になりましたが、「あいさつ」は人の心を優しくし、心を通わせるために必要なものです。知らない人や新しい友だちとコミュニケーションをとるために、まず「あいさつ」から始まるのではないですか？　生きていくために必要なアイテム、それが「あいさつ」であると思っています。